FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

平成24年度文化財公開展

2012.9.28 No.45

泰澄ゆかりの神仏（かみほとけ）

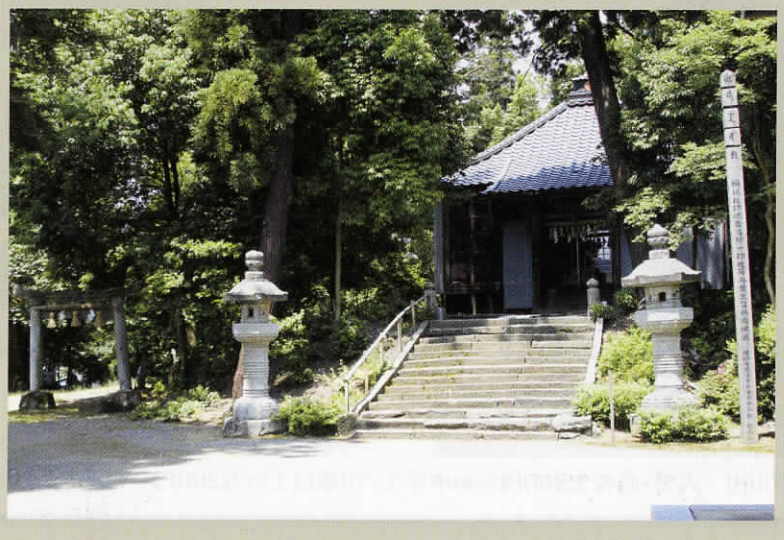
越前の宗教文化といえば「浄土真宗文化」がよく知られています。そして、それ以前の宗教文化は、総て戦乱や災害のなかで失われ、なにも残っていないというイメージが定着していました。しかし、地域に分け入り詳細に調べると、地元と歴史の関わりのなかで多様な信仰と造形を残していることがわかってきました。仏教との関わりから大きく分けると「泰澄と神仏習合」「浄土真宗と諸派」「永平寺と禅宗文化」などが挙げられます。これら越前の宗教文化を「地域」と「文化財」という側面から顕彰することを目的として、昨年秋は福井市旧美山町樺八幡神社を取り上げ、都とも通じる美山町の文化の一端を紹介しました。今年の秋は第2弾として、泰澄大師ゆかりの4社寺を中心に展覧会を行いますが、本紙では展覧会の概要を少しだけ紹介します。

一、泰澄寺のみほとけ

泰澄大師の伝記として有名な「泰澄和尚伝記」によると、泰澄大師は、越前国麻生津（現在の福井市浅水町付近）で生まれたと記されています。その生家を寺としたとされるのが、福井市三十八社町の「泰澄寺」です。寺伝によると泰澄大師35才の折り、白山へ行くにあたり自らの肖像を刻み、母親に身代わりとして預けたのが、大師堂本尊「泰澄大師坐像」と伝えられ、33年に1度しか開帳されない秘仏とされています。現在も泰澄大師を信仰する多くの人々によって寺が護持され続けていることは、きれいに清められた境内から感じ取ることができます。今回の展示ではその秘仏・泰澄大師坐像が厨子の扉を開き、お出ましになられます。他の泰澄像に比べ、若々しく凛々しいお顔立ちです。製作時期は鎌倉時代と考えられますが、衣紋や木寄せに古風な要素を残しています。また、廃仏毀釈以降個人宅で秘蔵され、近年泰澄寺に納められた平安前期の伝泰澄大師坐像（福井県指定文化財）も合わせ、泰澄像とされるものでは最も古い2躯が並びます。

二、様々な泰澄大師像

泰澄寺所蔵の2躯の泰澄大師像に合わせて、代表的な泰澄大師像も集まりました。まず、有名な文化庁所蔵（大谷寺旧蔵）泰澄及び二行者像（国指定重要文化財）は明応2年（1493）の造像銘を持つ基準資料としても重要です。文化庁像より31年後の大永4年（1524）に造られた新潟県能生白山神社所蔵の泰澄大師像（新潟県指定文化財）は、親しみを感じる穏和なお顔の像です。また、絵像として白山曼荼羅に描かれたお姿をご覧頂き、絵画・立体像含め共通した図像のもとに制作されていることを視覚的に捉えていただきます。



福井市 泰澄寺 境内風景

三、旧蕗野寺のかみ・ほとけ

泰澄寺から南に位置する福井市冬野町の山裾には、かつて蕗野寺(吹野寺・冬野寺)と呼ばれる山寺がありました。勢力を持った大きな寺院であったことは京都東寺に伝わった文書から知ることができます。廃仏毀釈に際し、猿田彦神社となりましたが、祀られていた仏像は難を逃れ、今日に伝わっています。

十一面観音菩薩立像は、泰澄大師が自ら刻んだとされる像です。内刳りのない一木造で、膝の衣紋が美しく、檀像の特色をみせる、平安後期の作と考えられます。

「おしし、はーなはな～」の声と共に、獅子頭が神社から里に降りて来ます。神社がもっとも賑やかになる春祭りの用具も合わせて展示し、民俗的側面からも捉えます。

四、朝日観音と日吉神社のかみ・ほとけ

朝日観音は、江戸時代に編纂された『越前国名蹟考』によると、泰澄大師が立ち木にそのまま観音像を刻んでいた時、観音像の眉間に朝日が当たり、その様子がただごとではない輝きを見せたことから「朝日」を冠し、寺名にもなったと伝えられます。東寺に伝来した文書から中世には「朝日寺」と呼ばれ、大きな勢力を持っていたことがわかります。

今回の展示では朝日観音の秘仏本尊・正観音菩薩立像がお出でになります。像高は2mすこし超える大きな像です。「菩薩」であるのに如来風の袈裟衣を纏う、中国宋の図像に影響を受けた珍しい姿の観音像です。製作時期は宋風のいでたちや玉眼であること等から鎌倉時代と考えられますが、越前では数少ない鎌倉時代の等身以上の像としても貴重です。朝日観音にはもう 1つ、千手観音菩薩立像も伝わっています。この像も等身をやや超える像高180.1cmと大きな像です。正観音菩薩像が当時最新の宋様式で作られているのに対し、千手観音菩薩像は、平安時代前期を思わせる風貌を持ち、構造的にも一木造で内刳りがなく、古様を示しています。製作時期は平安末期から鎌倉時代と見られます。日頃、お寺では別々のお堂に祀られている2躯の観音像ですが、展示室ではお顔を合わせ、両像の新・旧2つの様式が比較できるのも楽しみの一つです。

大きな寺院や神社では中世頃から儀礼等を、別当寺と呼ばれる寺院が管理・執行していました。朝日観音は、近世以降の記録によると、「福通寺(郡栄山長福院)」が別当寺であったようです。この福通寺の旧仏とされる仏像群が内郡地区日吉神社に伝わっています。

巨大な金剛界大日如来坐像は福通寺本来の本尊であったと伝える像です。残念ながら膝等は後世の材に変わっていますが、頭部と一体の宝冠や奥行きのある横顔等定朝様の影響の少ない平安前期の古様な姿の像です。地蔵菩薩立像は、内刳りのない一木造りで、衣紋をほとんど刻まないことや、衣の裾を握る等珍しい姿をしています。この他、近年の修理により面目を一新した二天像など個性的な平安仏をご覧頂きます。

以上、その殆どの仏像が寺外での初公開であり、日頃お顔を拝することのできない秘仏が一堂に集まる、二度とないであろう展覧会です。泰澄大師の生家とされる泰澄寺と、地理的に遠くない泰澄開基の二大寺と関連の一社を取り上げ、越前の仏教文化の一端と、これらを結ぶキーマンとなる泰澄大師の足跡に触れて下さい。

写真1　泰澄大師像 能生白山神社蔵

写真2　正観音菩薩立像 朝日観音別当 福通寺蔵

開催期間　平成24年10月27日(土)～11月25日(日)

観覧料 一般 400円　大学・高校生300円　小中学生・70歳以上の方200円　※30名以上の団体は2割引

館蔵品紹介

駅弁貼込帳から

～ある旅行者による今庄駅「上等御弁当」の感想～

当館では、明治30年代から昭和末期までの駅弁掛紙を約五千数百枚収蔵しており、質・量ともに全国でも有数のコレクションとして知られています。

その駅弁掛紙の収蔵形態は、1枚1枚バラの状態が大部分ですが、一部には旅の記録としての貼込帳の形態を呈したものも存在します。この貼込帳は、単に掛紙を台紙に貼り付けただけのものと、旅行の行程や感想などを記し、また場合によっては旅の先々で入手した様々な記念品を合わせて貼付したものの2種に分けることができます。

今回ご紹介する貼込帳は後者の例であり、大阪在住の某氏が昭和5～10年の間に旅行した記録のものです。

彼は昭和7年8月20日18時45分発の急行に乗り大阪から東京へ出発し、その後、上野から上越線経由で新潟へ。その間に湯沢温泉で1泊。22日に新潟からは汽船で佐渡へ渡り、25日に佐渡から汽船で直江津に渡り、北陸本線経由で26日に大阪へ戻っています。彼は旅行中に、京都、国府津、大宮、長岡、糸魚川、今庄の各駅で合計6個の駅弁を買っています。旅行日程は6泊7日ですが、佐渡には鉄道が無いので実質は4泊5日の鉄道旅行で6個の駅弁を購入していることから、現在の鉄道旅行では考えられないほど昭和戦前期には旅行中の給食を駅弁に頼っていたことがわかります。

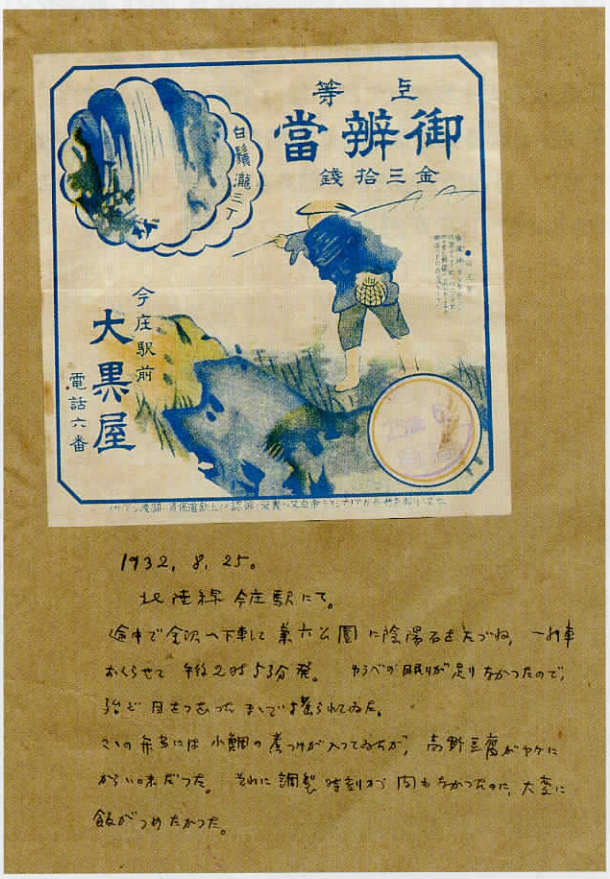
彼は、8月25日のページに福井県今庄駅での駅弁について、購入した駅弁の掛紙を貼り、下記のように感想を記録しています。

「1932, 8, 25。
北陸線今庄駅にて。
途中で金沢へ下車して兼六公園に陰陽石をたづね、一列車おくらせて午後2時53分発。ゆうべの眠りが足りなかったので、殆ど眼をつむったままで揺られていた。
この弁当には小鯛の煮つけが入っていたが、高野豆腐がヤケにからい味だった。それに調整時刻から間もなかったのに、大変に飯がつめたかった。」

彼が買ったのは、今庄駅で駅弁の立売をしていた大黒屋が調整した30銭の上等弁当。弁当の中身に小鯛の煮つけと高野豆腐が入っていたことがわかります。幾つかの例外を除くと、戦前の駅弁の内容物については記録されていることが無く、貴重な記録を残してくれました。彼は「大変に飯がつめたかった」と不満を記していますが、彼が記した金沢発の時刻を頼りに当時の時刻表を見ると、米原行きの各駅停車603列車に乗ったものと思われます。この列車の今庄着は18時40分なので、駅弁に押されている調整時刻「後6」(18時)から程なく購入したものと思われますが、それでも「大変に飯が冷たかった」のは、恐らく弁当屋は、夏という時節柄のため調製後に冷やしていたものと考えられます。

当館には『構内営業関係綴り』という戦前の鉄道省が保管していた公文書が多数収蔵されていますが、その中に駅弁の腐敗に対する利用客からの投書が複数認められます。調製から販売までの間の保冷環境が劣悪だった戦前では、腐敗防止のための苦心が様々な形で存在したものと思われます。今庄駅での「大変に飯が冷たかった」というのも、腐敗防止のための行き過ぎた保冷が原因だったものではないでしょうか。

(水村伸行)



駅弁貼込帳

館蔵品紹介

歓喜天社

聖天あるいは、歓喜天、大聖歓喜天などと呼ばれる仏様(天部)がいます。この仏様について、広く知られている図像は、象頭人身の単身のものか、象頭人身と女神が抱き合っている双身のものです。その他にも、頭上に象を二頭載せ、四臂(腕が4本あること)としているものもあります。元々ヒンドゥー教の神であり、ガネーシャやガナハチと呼ばれる神様です。インド料理やインドの雑貨を扱う店などで象頭の神様のポスターや像をご覧になったことがある人も多いかと思います。このガネーシャが仏教に取り込まれ、歓喜天という天部の一つとなりました。日本では夫婦和合、子授け、また、商売繁盛の御利益があるとされ、信仰を集めました。奈良県の生駒聖天、東京都にある待乳山聖天などが全国的に有名です。福井県内では歓喜天をお祀りしている寺社は少ないようです。

さて、今回取り上げた資料である歓喜天社は、福井市内の個人から寄贈されたものです。社殿は、屋内に祀られるものとしてはかなり大きなものでしたが、残念ながら、元の大きな社殿は、コンクリートで設置してあり、取り外しの問題と大きさから、内陣のみを寄贈いただくことになりました(写真1)。社殿の彫刻や硝子戸、提灯、瓶子など、いたる所に大根と巾着が付されています。この大根と巾着は歓喜天を表すものとして、よく使われるものです。本尊である歓喜天像は頭上に象頭を二つ載せ、四臂となっており、持物に大根と巾着があるという、なかなかユニークなものです(写真2)。

この歓喜天社は、元々、だるま屋(現・西武福井店)の店長室に祀られていたもののようです。だるま屋には屋上に白光神社(はくみつじんじゃ)という白蛇を祀った神社、少女歌劇団が活躍した劇場の楽屋には弁財天を、そして、店長室にはこの歓喜天を祀っていたようです。しかし、実際にどのように祀られていたのかはまだよく分かっていません。白光神社は、現在でも西武福井店屋上にお祀りされています。西武百貨店屋上には稲荷神社を祀ることが通例であることから、「だるまや西武」となる時にも稲荷神社を祀ることにするという動きがあったようですが、だるま屋の創業者であった坪川信一氏が白光神社を祀る経緯を説明したため、現在でも残されています(写真3)。歓喜天は、震災のあった昭和23年(1948)前後に寄贈者に譲ったようです。譲られた寄贈者の家ではそれ以来熱心に世話をされていました。しかし、弁財天についてはどうなったのか分かっていません。

白光神社については坪川氏により由来が述べてあるものがあり、お祀りするに至った経緯が分かっていますが、歓喜天、弁財天については、どの時期から、なぜ祀り始めたのかなど分かっていません。これらが分かることで、近代における福井の商業者の信仰の形態の一つを示すことができるものとなると思います。もし、この経緯やどのようにお祀りされていたかをご存知の方がいらっしゃいましたら、博物館までお知らせください。

(川波久志)

写真1　歓喜天社

写真2　歓喜天像

写真3　白光神社(西武福井店屋上)

館蔵品紹介

橘家文書・織田信長定書

当館所蔵の橘家文書は、福井市西木田の橘家に伝えられた史料群です。平成2年(1990)に中世文書50点余を含む一部が当館へ寄贈され、その後『福井市史』編纂事業の調査で新たに確認された古文書などが平成11年(1999)に寄託されました。史料群の総点数は、約1200点を数えます。福井市の市街地では戦災や震災によって数多くの歴史資料が失われましたが、橘家文書は少なくとも中世後期までさかのぼる旧家に代々受け継がれてきた、非常に貴重な史料群だといえます。

ここで紹介する古文書は、天正2年(1574)正月付で越前国木田庄の有力商人・橘屋三郎五郎に宛てて出された織田信長の朱印状です(写真1)。前年8月に朝倉氏が信長によって滅ぼされ、信長の越前支配が始まっていた時期にあたります。朱印はこのころ信長が使用していた馬蹄形のもので、「天下布武」の印文を確認することができます(写真2)。

朱印状の内容を簡単にまとめると、信長は橘屋に対して、唐人座と軽物座の商人から役銭として上等の絹1疋ずつを上納させよ、もし納めない者があれば座から追放せよ、この役銭はこれまで諸役免除の朱印状を受けている者であっても上納すべきものである、と命じています。

唐人座とは中国からの輸入品、いわゆる「唐物」のうちとりわけ薬を扱う商人の座(同業組合)と考えられており、軽物座とは絹織物の売買に携わる商人の座を示しています。また両座にかかわる町場として、足羽川を挟んだ現在の福井市中心部である足羽三ヶ庄(北庄・社庄・木田庄)のほか、一乗谷、三国湊、端郷(足羽郡東郷か)が記されています。とくに当時すでに商業都市として発達していた三ヶ庄の軽物座は、朝倉氏からも領国内の独占営業権を保証されると同時に、役銭の納入を義務づけられていました。

一方、橘屋は朝倉氏の時代から木田庄で主に調合薬の商売を営んでおり、朝倉義景から諸商売の免許と諸役負担の免除を認められていました。朝倉氏滅亡直後の天正元年(1573)9月には、信長政権から「軽物座長」を命じられ、橘屋は越前北部の唐人座と軽物座を統括する存在となります。この朱印状は、こうして信長政権下において両座の支配権を与えられた橘屋が、両座の商人から役銭を徴収することについて定めているのです。

その後、柴田勝家の統治下においても、橘屋の両座に対する権限が追認されました。天正4年(1576)9月、勝家は北庄で「諸商売楽座」を命じて座の存在を禁じていますが、唐人座・軽物座は除外され、橘屋による両座の支配と役銭徴収が継続しています。「楽市楽座」といえば信長政権に特徴的な商業政策としてあまりにも有名ですが、ここまで述べてきたように、越前においては商人の座を認めることで、橘屋ら有力商人を通して統制を図るという政策もとられていたのです。

橘家文書に含まれている中世文書はこれまで、北庄の町方や信長政権の商業政策を知りうる史料として、日本中世史の学界で注目されてきました。しかし、中世文書は橘家文書のなかのごく一部であり、圧倒的に多く残されているのは近世文書です。戦国時代の有力商人・橘屋が近世に入ってから歩んだ歴史を丁寧に明らかにすること、そこから福井城下町の社会の様相に迫っていくことは、今後の重要な課題です。

(久角健二)

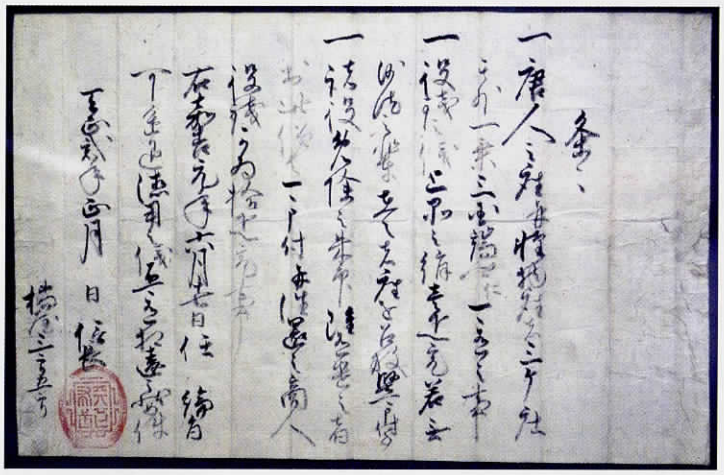


写真1　織田信長定書

写真2　織田信長定書 朱印部分

百貨店・だるま屋の『コドモの国』
遊技場から屋上遊園地まで

昭和3年（1928）、福井市中心市街地（県庁跡地）に県内初の百貨店「だるま屋」が開業しました。その後、だるま屋はステイタスを示す買い物の場であるだけでなく、子どもたちにとっても「あこがれの場」でもありました。その中心が、「コドモの国」という名称で設けられた子ども向けの施設です。ここでは、戦前から昭和４０年代までの「コドモの国」について見ていきます。

百貨店・だるま屋と「コドモの国」

「だるま屋」は、開業当時、間口１７間（約３０メートル）、奥行１５間（約２７メートル）の木造２階建ての本館と、木造１階建ての別館（市場）とからなる、県内初の百貨店でした。本館には屋上庭園が設けられ、噴水や植栽で買い物客の息抜きや子どもの遊びの場とされていました。

当初から、だるま屋には、「コドモ百貨部」「コドモ相談部」が設けられ、ともにだるま屋の１階に置かれていました。「コドモ百貨部」では、玩具、文房具、運動用具など子どもに関連する商品が扱われ、「コドモ相談部」では児童に関する質問を受け付けました。子どもを重視した方針は、創業者の坪川信一らがもと小学校教員であり、商業と教育・文化の融合を方針としたことに加え、県庁跡地に進出する際、後発の商業施設として福井駅前周辺の中小商店との競合を避ける意図もあったとされます。さらに、その背景として当時の百貨店の傾向も挙げられます。日本の百貨店は、呉服店をルーツとし（後に電鉄会社が加わる）、上流階級を顧客として高級品を扱っていました。しかし、大正期には都市部の「新中間層」（医師、公務員、銀行員、会社員ほか勤め人）に客層を広げ、かれらの子どもたちにも注目していました。それは、子どもを単なる「顧客」として捉えるだけではなく、明治末期から大正、昭和初期にかけてのいわゆる「児童文化」の広まりのなかで、百貨店が子どもたちに文化的な体験の機会を提供し、想像力や好奇心を育てる場となるという意図を含んでいました。そうした方針は、明治３４年(1901)に日本初の百貨店として設立された三越呉服店（東京）において、大正期に玩具の開発・販売や博覧会などが行われていたことからもうかがえます。だるま屋の方針も、全国的な傾向を取り入れ、さらに発展させたものとも考えられます。

子どもを重視する方向性は、昭和６年（1931）、別館「コドモの国」のオープンでさらに前面に打ち出されます（写真１）。本館東側に建てられた遊技場「コドモの国」には、動物ローリング、家族ブランコ、木馬遊歩道、砂場、象のすべり台といった遊具が配置され、町なかの安全かつ最新の遊び場として子どもたちの憧れの場所になりました。専属の「だるま屋少女歌劇団」も設立され、人気を集めます。しかし、その賑わいは、ほどなく終焉を迎えました。昭和６年(1931)の満州事変の勃発以降、市民の娯楽が規制され、昭和１１年、内務省の指示により少女歌劇団の活動は停止されました。

復興期の遊技場「コドモの国」

昭和２０年(1945)７月、福井市街地は空襲により大きな被害を受けました。約１万発の焼夷弾が落とされ、焼失家屋は約２万２千戸、死者・行方不明者１５００人以上にのぼり、だるま屋を含む市街地は焼け野原となります。それからほどなく、８月１５日、日本政府がポツダム宣言を受諾し、９月２日に降伏文書への調印をもって第二次世界大戦が終結します。戦後、だるま屋の復興店舗が

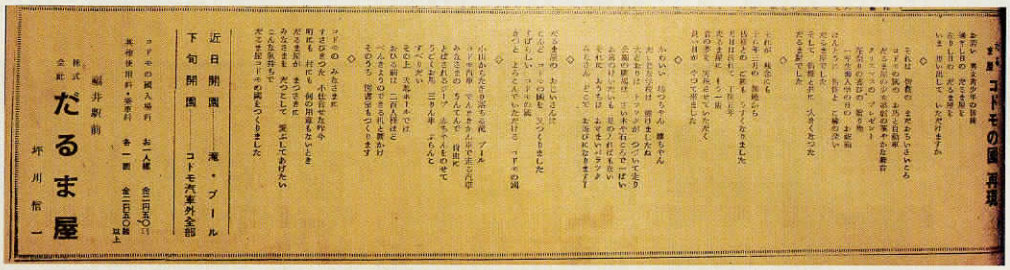


写真2　だるま屋広告（昭和２３年８月９日 福井新聞）越前市中央図書館 蔵

写真1　だるま屋絵はがき（昭和初期）

写真3　だるま屋広告（昭和２９年１月１日 福井新聞）

完成したのは昭和23年6月でした。しかし、同月28日の福井震災により、再び壊滅の憂き目にあいます。この年は、ちょうどだるま屋の創業20年にあたり、記念行事や記念品を準備したなかでの被災でした。

それでも、そのわずか1か月余の後、23年8月にだるま屋は再び開業にこぎつけます。この店舗は木造2階建てで、2階部分に遊技場「コドモの国」が設けられました。芝生が植えられ、すべり台やシーソーが備えられたほか、8月中旬には、プールや「コドモ汽車」「図書室」などもオープンしました。その広告の文言からは、度重なる苦難のなかで、子どもたちの笑顔を取り戻したいという思いがうかがえます。(写真2)

屋上遊園地「コドモの国」

昭和28年(1953)秋、鉄筋コンクリート3階建ての新館が完成し、翌29年1月1日、屋上遊園地「コドモの国」がオープンします(写真3)。昭和30年代前半の写真からは、おもな遊具として「飛行塔」「ミニ機関車」「馬の乗り物」などが設置されていたことが見てとれます。なかでも、「飛行塔」は、屋上の隅に近い場所に設置されたため、屋上をはみ出して回るスリルと、高所からの展望のよさで人気を集めました。飛行塔の前には長蛇の列ができ、子どもだけでなく大人も飛行機に乗り込み楽しみました。ちなみに、飛行機の料金は1回10円でした(写真4)。

また、昭和33年の夏の広告では、屋上で「人造人間」(リモコンで動くロボット)が披露されることが告知されています(写真5)。子どもたちの夏休みのレジャーの一角をだるま屋が担っていたのでしょう。昭和40年1月1日の新聞広告には、観覧車やモノレールが描かれています(写真6)。大型遊具を増やし、さらに魅力ある遊園地を目指した積極的な姿勢を知ることができます。昭和45年1月1日、新年のだるま屋の広告は、屋上遊園地で撮影された店員の集合写真でした。しかし、このころには、だるま屋と「コドモの国」を取り巻く状況は厳しさを増していました。

おわりに「コドモの国」の面影

昭和40年代半ば、だるま屋の屋上遊園地の存在感は薄れていきます。その要因のひとつは、スーパーマーケットや郊外型ショッピングセンターの進出による消費活動の多様化により、「駅前の百貨店」自体に以前ほど集客力がなくなったことです。昭和40年代前半までの商業の中心地は、鉄道の主要駅を中心とした商店街と百貨店でした。しかし、昭和30年代後半から駅前のほか各地にスーパーマーケットが開店し、ついで、40年代後半から50年代半ばにかけて郊外に広大な駐車場を備えた大規模ショッピングセンターが進出します。福井県では昭和30年代後半から、ユース、福進チェーン、ハギレヤ、くみあいマーケットなどのスーパーマーケットがチェーン店を増やしました。ショッピングセンターの開業も相次ぎ、48年に「みゆきショッピングプラザ」、50年に「新田塚ファミリーランド」、52年に「二ノ宮ハニータウン」、「フクイショッピングプラザ・ピア」、55年に「ゴールドショッピングセンター・ベル」とつづき、さらに福井市外でも三国、鯖江、大野、芦原、勝山、松岡にショッピングセンターがオープンしました。

また、子ども向けの施設も増えていました。嶺北地方だけでも、昭和34年に松島水族館(プレイランド併設)、39年に東尋坊温泉ファミリーランド、福井国体後には福井運動公園(子どもの国)などがオープンし、自家用車で訪れる家族連れで賑わうようになります。こうしたなか、買い物の場としても、子どもの遊技場としても、だるま屋と屋上遊園地の優位性は薄れつつありました。

さらに、百貨店だるま屋の状況も変化していきます。昭和45年に株式会社西武百貨店と提携、46年に店内外改装工事、昭和50年に駅前再開発事業との関連で駅前仮店舗へ移転とつづき、最終的には、昭和55年、「だるまや西武」として再オープンします。鉄筋8階建ての新築店舗の屋上には遊園地がオープンし、メリーゴーランドや仮設ステージなどが設けられました。とはいえ、この時点では、建築基準法や消防法の規制により屋上に

写真4　だるま屋屋上遊園地飛行塔(昭和30年代)

写真5　だるま屋広告(昭和33年7月3日 福井新聞)

写真6　だるま屋広告(昭和40年1月1日 福井新聞)

大型の構造物を設置することが難しくなっており、遊園地の規模は縮小されていました。また、百貨店の方針も「東京ファッションの高級衣料」を主力とするとされ、従来のように子どもがターゲットとして全面に出ることはなくなっていました。

こうして、戦前から最新の遊具を備え、戦後には飛行塔や観覧車から福井市内を一望できた屋上遊園地、長く福井の子ども文化の発信地として、笑顔とあこがれを集めた「コドモの国」の面影は遠くなっていったのです。

（瓜生由起）

博物館日誌（平成24年3月～8月）

3月

- 2月4日(土)～3月20日(祝・火)
  写真展「冬のまつりー民俗行事の記録よりー」（エントランスギャラリー）
- 1日(木)
  国学院大学博物館研究室来館（館内見学）
- 6日(木)　文化庁来館（施設調査）
- 7日(水)
  福井市郷土歴史博物館来館（資料貸出）
- 9日(金)　常設展示入れ替え
- 15日(木)　博物館運営協議会

4月

- 4日(水)
  射水市新湊博物館来館（資料貸出）
- 26日(木)～5月31日(木)
  ミニ企画展「昭和の幼稚園」（オープン収蔵庫）
- 28日(土)～6月3日(日)
  発掘成果展「いにしえの大野」（特別展示室）
- 16日(月)
  安土城考古学博物館来館（資料貸出）
- 17日(火)
  福井市橘曙覧記念文学館来館（資料調査）

5月

- 1日(火)～7月10日(火)
  写真展「ふくい・春夏のまつり　民俗行事の記録より」（エントランスギャラリー）
- 12日(土)
  福岡市博物館来館（資料調査）
- 24(木)・25日(金)
  北信越博物館協議会大会（坂井市三国町）
- 28日(月)
  韓国国立中央博物館来館（資料調査）

6月

- 4日(月)～13日(水)　メンテナンス（燻蒸などのため）、休館
- 16日(土)～7月8日(日)
  特別公開「姉川合戦図屏風」（オープン収蔵庫）
- 20日(水)　敦賀市博物館来館（資料貸出）
- 22日(金)　神奈川県立博物館来館（資料調査）
- 26日(火)　文化庁来館（資料調査）
- 27日(金)　国立歴史民俗博物館来館（資料調査）

7月

- 12日(木)
  安土城考古学博物館来館（資料調査）
- 12日(木)～9月2日(日)
  写真展「ふくいの遊園地」（エントランスギャラリー）
  夏休みミニ企画「昭和の夏休み」（オープン収蔵庫）
- 21日(土)～9月2日(日)
  特別展「玩具の100年ー玩具でたどる明治・大正・昭和ー」（特別展示室）
- 27日(金)
  一乗谷朝倉氏遺跡資料館来館（資料貸出）
- 29日(日)　ふくいキッズミュージアム
  「模型飛行機を作ろう！」

8月

- 1日(水)～6日(月)　博物館実習（7名）
- 5日(日)
  ふくいキッズミュージアム「自然素材でロボットを作ろう！」
- 11日(土)～27日(日)
  歴史博物館移動企画展（夏休み特別企画展）「鉄道と旅」（若狭歴史民俗資料館）
- 18日(土)
  ふくいキッズミュージアム
  「だるまや屋上遊園地の飛行機を作ろう！」
- 19日(日)
  ふくいキッズミュージアム
  「ジャバラートで細工絵にチャレンジ！」
- 26日(日)
  ふくいキッズミュージアム「竹水鉄砲を作ろう！」
- 29日(水)　福井県博物館協議会総会
- 31日(金)　博物館運営協議会

[編集・発行]
福井県立歴史博物館
〒910-0016　福井市大宮2-19-15　TEL0776-22-4675㈹
http://www.pref.fukui.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム
No.45　2012.9.28発行